声なき感染症を知る ◆45◆

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

急速に多臓器不全に

兆候あれば即受診を

県感染症情報センター

▽「人食いバクテリア」の異名

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、突発的に発症し、急速に多臓器不全（肝臓、腎臓、肺など生命維持に不可欠である重要な臓器が機能不全に陥った状態）に進行する病態で、レンサ球菌という細菌によって起こります。

メディアなどでは、「人食いバクテリア」といった病名で、センセーショナルな取り上げ方をされることがあります。

1987年に米国で最初に報告され、その後、ヨーロッパやアジアからも報告があり、日本では1992年に最初の典型的な症例が報告されました。

▽症状

初期症状は、主に手足の局部（患部）の痛みと腫れ、発熱、血圧低下などで、病状は発病してから非常に急激かつ劇的に進行します。

軟部組織壊死（生体の組織や細胞が局所的に死滅）から急性腎不全や、成人型呼吸窮迫症候群（重症の呼吸不全をきたす病気）、そして播種性（はしゅせい）血管内凝固症候群（血管内で無秩序に血液凝固が起こる病気）から多臓器不全を引き起こし、ショック状態となって死に至ることも多いといわれています。これらが発病後、数十時間以内にみられます。

2012年から2014年までの調査では、患者発生の届出時点で致死率29％（届出後に死亡した例を含まない）でした。届出時点の死亡例の76％では発病から3日以内に死亡し、41％では発病当日もしくは翌日に死亡していました。

▽近年は増加の傾向

日本では毎年100～200人の患者発生が報告されていました。近年は増加傾向にあり、昨年は12月17日までの時点で539人と、過去最高となりました。奈良県でも、2011年以降毎年患者が発生し、ここ数年患者数が増えています。

▽溶血性レンサ球菌について

レンサ球菌は、球状の形をした菌が、数珠（じゅず）状に連なっている形態を特徴とする細菌です。そのうち、検査において「溶血性」という特徴を示すものが「溶血性レンサ球菌」で、普段は人ののどや皮膚などに生息していると考えられています。

一般に「溶連菌」とも呼ばれ、小児に多い咽頭（いんとう）炎の原因菌としてよく知られています。感染してもたいていは重い病状にはなりませんが、まれに重篤な劇症型溶血性レンサ球菌感染症劇症を引き起こします。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、子どもから大人まで幅広い年齢層で発症しますが、特に30歳以上の大人に多いことがひとつの特徴です。どのような仕組みで「劇症型」として発症するのか、「劇症型」を発症する菌に何か特徴があるのか、研究が進められています。

▽予防と対処

感染経路としては、創傷感染（傷口の感染）に続発する場合のほか、上気道感染（鼻や喉の感染）に続発する場合や、感染経路が不明の場合があります。

傷口を清潔に保つこと、創部の発赤（ほっせき）や腫（は）れ、痛み、発熱など、感染の兆候が見られた場合には、直ちに医療機関を受診することが、劇症型溶血性レンサ球菌感染症を予防するために重要です。

溶血性レンサ球菌には有効な抗菌薬があるので、発症した場合には、できるだけ早く治療を開始することが必要です。

（県感染症情報センター）

全国と奈良県における患者発生数の推移（感染症発生動向調査より）

年	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
全国(人)	113	103	122	197	242	203	268	415	494	539
奈良県(人)	0	4	0	1	1	1	2	2	5	9

※2017年は12/17までの届出数